

【研究発表】

武本 京子

「イメージ奏法」による「音楽の構造のとらえ方」と 「イメージに導かれた表現方法と奏法」

【要旨】

発表者が開発、発展させた「イメージ奏法」を紹介し、大学の授業での実践例を示しながら、楽譜の中に潜む心の叫びを読み解く「音楽の構造のとらえ方」と「イメージに導かれた表現方法と奏法」について発表を行なった。

イメージ豊かなピアノ演奏技術習得のための「演奏表現設計図」(以下、「演奏設計図」と表記)の制作の理念と「具体的奏法」への導き方として、楽譜に「物語」と「表現曲線」「色」「具体的奏法」を記載した学生制作の「演奏設計図」を提示した。この方法の成果として、練習嫌いな学生の指導に表現意欲の改善に有効であり、演奏技術の向上につながることにについて述べた。

1. 「音楽の構造のとらえ方」としての「イメージ奏法」の活用

ピアノ演奏指導者は生徒と共に音楽作品を分析し、言葉・色・表現曲線などで「演奏設計図」を作る。方法として、

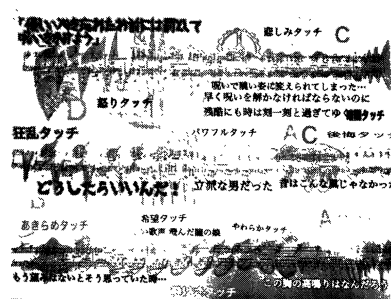
- ① 演奏する作品の楽譜と向かい合い、曲の内容に合う「うれしい」とか「悲しい」といった感情的な「イメージ語」を考える。
- ② 曲の進行に伴ってイメージ語も変化するので、そこから想像をふくらませて「物語」のあらすじを作り、表現したいイメージへの理解を深めて全体の構成を考える。
- ③ 楽譜に音が作り出す立体的な空間を表す「表現曲線」を描き、奏法に導く心と体の予備運動を誘発する「色」を塗り、「演奏設計図」として完成させる。

イメージ奏法の授業導入することで、何を表現したいのか、具体的にどのような練習をすればその世界が描けるのかを、指導者と学生が納得する「双方向教育」が可能になる。

2. 「演奏設計図」のイメージに導かれた「表現方法と奏法」

本発表では、具体的に「演奏設計図」を提示し、演奏しながら奏法の解説を行ない、イメージに導かれた「具体的奏法」の多様性とそれに伴う、学生の練習意欲と技術向上の成果に結び付ける授業の方法を述べた。その結果「イメージ奏法」を通して、音楽に潜む人間の感情、人間関係、自然や社会問題など、様々なものとの関わりを見つけることで、音楽の修得のみならず、人生における「人間力」と「心の力」の育

成に役立ち、自己表現の確立と自己開発を伴う表現力の育成ができることについて述べた。色鉛筆と携帯のアプリで学生が作った「演奏設計図」(一例)を示し



図：演奏設計図 ブラームス：ピアノソナタ第3番 op.5へ短調第1楽章

ておく。なお、原画はカラーで描かれている。

【質疑応答】

石原まり(演奏)：「演奏設計図」は読譜のみの状態で描かせるのか。

武本：さまざまな演奏を聴いたうえでイメージをまとめ、楽譜「演奏設計図」を作る。日々、イメージも変化する。イメージをつくったときの自分の気持ちが大切である。変遷があり、最終的に再度作り直すよう指導している。

浦雄一(作曲・指揮)：言葉のポキャブラリーや色彩は、学生にどのようにつけさせるのか。

武本：見本がある(武本著『イメージ奏法解説書』を提示)。大人と子どもでは使う言葉も異なる。なかでも、色のイメージは非常に多岐にわたる。現に、(武本)自身の抱くイメージと学生が抱くイメージが随分違っていることがあり、幾度も話を聞き、イメージを共有する。その際、イメージを多方面に書かせ、グループで作業を行うことによって他者の力も借りて、イメージを絞り込んでいく。

浦：音楽でしか表しきれない音楽に出会ったときはどうするのか。

武本：音を具体化することにつぎる。音の具現化にあたって、「こういうふうに表示したい」という気持ちを高めさせることが大切だと考えている。本発表でとりあげた「イメージ奏法」は、視覚的表現・刺激と聴覚的表現・刺激が相互に行き交う。それが音の具現化を手助けする。

発表者：武本 京子(ピアノ/愛知教育大学)

司会者：澁谷 由美(音楽教育/愛知学泉大学)